

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 竹峰義和

竹峰義和氏の博士学位請求論文「<文字>としての映像——テオドール・W・アドルノの映像メディア観の変遷」は、アドルノの、映画をはじめとする映像メディアに関する多くのテキストを辿る作業のなかで、実は彼は複製テクノロジーに基づく大衆的な映像メディアを必ずしも否定的に評価していたのではなく、むしろそこにいわゆる「文化産業」の概念に回収できぬポテンシャルを見ていたことを緻密に考察・論証した画期的なアドルノ研究である。

分量的にはA4用紙で230頁ほどの広いスペースの中で、竹峰氏はこの作業における分析の主要なツールとして、表題のような「文字」*Schrift* という概念を選んでいる。この概念は、ヴァルター・ベンヤミンの主著『ドイツ悲劇の根源』に出自を負っており、その後僚友のマックス・ホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』を経て、彼自身の重要な哲学書『否定弁証法』や遺著の『美学理論』においてのみならず、映像メディアを論じた数多くの論文・エッセーのなかでアドルノ自身しばしば使っていたものなので、「文字」の概念は、氏の論文の主張の一貫性を支える重要な柱として機能した。

音楽理論家としてのアドルノの立場はすでに欧米において確立されたものであるが、本論文において氏は、さらに映画、レコード、ラジオ、テレビなどの視覚的な複製技術メディアに関する彼の多くの発言を丁寧に分析して、アドルノがこうした映像メディアの領域においても、いわば「メディア美学の萌芽」を発展させていたと結論づけ、いままで注目されることの少なかったこの領域において、すぐれた美学的考察を展開した哲学者の姿を見事に捉えている。

浩瀚な本論は、6章から構成されている。

第1章では1930年代に発表されたエッセー「ラジオの権威と流行歌放送」や「ジャズについて」など初期の大衆音楽論が論じられている。アドルノはラジオによって流行歌、ジャズが流布するさまを取上げ、ナチが抑圧する現代音楽を擁護せんとする意図を秘めながら、表面的には「非アーリア的な文化」から押し寄せてくる「流行歌を叩こう」というナチスに似た主張を行い—「流行歌を叩き潰せ」という第1章のタイトルはここに由来する—、彼に特徴的な複雑で二面的な作戦を実行している。竹峰氏は、流行歌が大衆に体制側から供与されるプロセスでは、体制の「文化産業」の側は大衆に対し「(ハンマーのように) 叩き込む」*einhämmern* とか、「殴打する」*schlagen* という単語から派生した言葉などが、アドルノにおいて意図的に使われていることを指摘する。このメタファーは彼の代表作の『ヴァーグナー試論』にも見出されると指摘する竹峰氏は、「殴打」を行う「文化産業」のなかで極端にまで物象化は進行するが、まさにこうした極端な状況こそが「急転」*Umschlag* してユートピア的救済の可能性が現われ出ることを、

文献的に着実な作業を基礎として明らかにしている。

「物象化と救済」と題された第2章において竹峰氏は、ベンヤミンとアドルノに共通していたカフカへの深い関心を素材にしている。氏は、初期映画をことのほか愛好していたカフカの作品を介在させながら、商品経済体制のなかで徹底的に疎外・物象化された商品の「救済」の可能性をめぐるアドルノの議論を再構成し、また他方で、アドルノがクルト・ヴァイルの論考を踏まえつつ、モンタージュ技法のなかに、「文字」的な布置状況を現出させる機能を見出しており、これがのちにアドルノにおいて、映像と音楽とのモンタージュ的影響関係の問題に至ったことを竹峰氏は示している。

第3章はそのタイトルの「複製技術時代のファンタスマゴリー」が示すように、1940年前後の『ヴァーグナー試論』から『啓蒙の弁証法』へと至る時期のアドルノの思想から、第1章における「殴打する」という言葉の分析に示されたと同じような機敏な手際で、「イメージ=映像 (Bild)」と「文字」の両概念を丹念に辿り、ベンヤミン的な「中間休止」の結果としてその「星座的布置」Konstellation が現われ出る局面を鮮明にしている。以上3章はつづく第4章のための長い周到な準備作業となっており、読者は次の章の展開のなかで、その準備作業の周到さに納得させられる。

第4章は「闘う映画音楽」と題され、付属する2編の補論をあわせると、ここだけで70頁強の分量があり、その内容とも相俟って、この論文のヤマ場をなすとも言える。南カリフォルニア亡命期はアドルノとハリウッド映画との関わりが非常に強まった時期であり、竹峰氏はここ数年のうちに刊行されたアドルノの書簡集、全集補遺だけでなく、関係者たちの書簡集や伝記資料、さらにはネットで公開されたFBI側の「要注意人物」の相当な分量の監視記録などに至るまで、じつに多くの資料を博捜渉猟して、アドルノと映画との関わりをまず明らかにする。そのうえで、アドルノ/アイスラー共著の『映画のための作曲』の分析に至る。実質的にほとんどがアドルノ自身の筆によるこの独自の映画音楽論は、彼が映画製作の現場を身近に経験して、彼の望む映画音楽と現実とがいかに掛け離れているか痛感するなかで、いわば映画音楽のゲリラ的戦略はいかにして可能か、その問題と格闘するのである。氏は、こうしたアドルノの議論を、日本で初めて詳細に紹介・分析している。ここで映画音楽の批判的変革をめざしたアドルノの実践的な姿が具体的に明らかにされるのである。アドルノの「実践性」が如実に示されたことは、ことにこの章における氏の大きな功績である。また2つの補論は、共著者アイスラーの戦後の東ドイツでの運命、また、ハリウッドからはじまった名監督フリッツ・ラングとの交友関係などについて記述しており、そのことによってアドルノの伝記的裏面を明らかにしている。チャップリンをはじめとする多くの俳優、プロデューサー、監督らとの出会いは、彼のなかに多くの痕跡を残すことになり、これら有名無名の映画人たちのパノラマ的展望を見渡せるのも、氏のすぐれた筆力の結果である。

第5章では、こうしたイメージ=映像と音楽との激しい緊張関係にある映画音楽論を踏まえて、氏は1950年代のアドルノのテレビに関する発言を捉え直している。「アウシュヴィッツ以後」における主要な表象メディアであるテレビはいかなる機能をもつか、アドルノの議論が検証される。その検証の中でテレビに対する、必ずしも否定的でない対応が見出される。「文化産業」の主要メディアたるテレビにも実践的に参加して、難解な文章によるエッセーとは違う柔軟なわかりやすい語り口で、アドルノは社会への実践的働きかけにコミットしており、彼のこうした実践性を強調したのも竹峰氏の大きな業績である。

さらに最後の第6章において、竹峰氏は、晩年のアドルノの掲げる「映画の透かし絵」という概念を導きの糸として、「ニュー・ジャーマン・シネマ」として喧伝されたドイツ映画運動とアドルノとの関わりを取上げる。アドルノはこの頃弟子の一人が実際監督として映画製作に携わったので、彼自身この芸術形式を「文字」や「自然美」の概念によって解説しようとしているが、このとき使われた「自然美」の概念は前述の「モンタージュ技法」を介して幼年時代の知覚を蘇生させるための装置として機能している。竹峰氏はこのプロセスも綿密な手続きで明らかにしている。

アドルノは決して高級な知識人として社会に超然とふるまっていたのではなく、大衆的なメディアである映画やテレビに関して、むしろ彼は、そうした大衆的メディアからこそ「違う可能性」「ユートピア的可能性」の手掛かりを引き出そうと意図している。こうした観点に立脚しながら、アドルノの映像美学に、量的のみならず、質的にも高いレベルを保ちつつアプローチした氏の試みは、今後アドルノを論じる場合避けて通れぬ里程標的な位置を獲得している。

以上、概観した論文に対し、審査においては、「文字」概念はもっとアドルノ的問題圏の外側からも捉えるべきではないか、またアドルノの映画論を論じる際も別な補助線を必要としたのではないか、など異論ないし提案は出されたが、氏の論文が全体として非常にレベルの高いものであることは、異口同音に認められた。これまでのアドルノ研究にない徹底性をもって氏の研究が遂行されただけでなく、難解をもって鳴るアドルノ哲学を暢達の日本語による読みやすい叙述で提示したことにも、多くの委員から称賛がよせられた。

よって本審査委員会は全員一致で、氏の論文を博士（学術）の学位を授与するに相応しいものと認定した。